

〔原著論文〕

「鬼」という字の構造・和訓・意味について

于 心¹・高 継芬²

【要旨】

漢字は、日本への伝来から日本文化に定着するまでの長い過程を経て、現在の形・音・義になった。したがって、漢字の導入から日本語への統合までの過程を研究することは、日本文化を研究する上で不可欠なことである。とりわけ言語接触の視点から、漢字とその和訓との変化過程（字義の和化^{注1)}）に反映される文化が受容される際に現れる特徴は、日本文化の研究において重要な価値を持っている。

そこで本研究では、文化に意義のある漢字の中から「鬼」という字に着目し、その構造や構造が表すイメージを考察するとともに、上代文学における「鬼」の読み方を遡り、それぞれの読み方に含まれる意味を比較分析した。字の構造・和訓・意味間の比較研究を通じて、格別な日本文化的感受性をさらに探求した。

キーワード：「鬼」という字、言語接触過程、字義の和化、文化受容、文化的感受性

【緒言】

日本の文化は古来より中国の影響を受けているが、両国の鬼のイメージに対する認識は微妙に異なっている。一般的に日本人が想像する鬼の姿は、頭に角が一本または二本生え、乱れている髪、金棒、大きな歯、赤い肌など具体的な形を持っているのが特徴である。また、人情のない冷酷さを表し、強くて恐い人や勇猛な人を形容する言葉として使われることが多い¹⁾。それとは違い、中国人の鬼に対する認識は幽霊であり、具体的な形を持っていない。人間を鬼と表現する場合には蔑称として使われることが多く、「狡い」、「醜悪な」、「不気味な」などの否定的なイメージを含んでいる。

「鬼」という漢字は、約3800年前の甲骨文にも記されている^{注2)}。中国の最古の漢字字典である『説文解字』には、「鬼、人所歸為鬼。故從人、象鬼頭、陰氣賊害、故從厶」とある²⁾。日本の『古事記』(712)には、5世紀初頭に百済の和邇吉師が『論語』(紀元前6世紀)と『千字文』(6世紀初頭)を日本に伝えたことと記されている。『千字文』が6世紀

前半に編纂された漢籍であることは矛盾があるものの、これにより漢字の使用が広がったことは確かである。

また、平安中期に作られた漢和辞書である『倭名類聚抄』(930年代)は『説文解字』の内容と一致しており、「(鬼) 四聲字苑云鬼居偉反、和名於邇、或説云陰字、音於爾訛也。鬼物隱而不欲顯形故俗呼曰隱也人死魂神也」とされている³⁾。ただし、『説文解字』では「鬼」の字の構造と由来に重心を置いて説明しているのに対して、『倭名類聚抄』では「鬼」の字の和訓を中心に説明されている。

しかし、『倭名類聚抄』の「鬼が姿を人に隠すから『隠』というのだ」の通釈は、日本人が考える一般的な鬼の外見とは異なったものになっている。なおかつ、「オニ」は漢字文化を受容して固定化したものであり、それ以前は「モノ」などの和訓と長い間において混用されていた。つまり、「鬼」の字義が和訓の変化とともに和化(倭化)したといえる。

本稿では、特に日本語における字義の和化(それぞれの読み方が表す意味)のプロセスを取り上げ、日本文化が「鬼」の字形と読み、意味にどのような

¹ 成東東軟学院、² 九州看護福祉大学

影響を与えてきたかを明らかにするとともに、言語接触論における借用形式の観点から^{注3)}、「鬼」の字を用いた和訓との対比を通して、漢字文化の受容に反映される日本文化の独特な感性を探索する。

1. 「鬼」の字の和訓

漢字が日本に伝わってからは、通用文字として日本の文化、歴史、思想、宗教を記すようになった。「鬼」の最初の訓読みについてもまだ定説はないが、「オニ」と読まれたのはおよそ平安時代の中期であるとされている。『倭名類聚抄』では、鬼は隠れて形を現わさないことから、「隠」の字の音の訛音を和訓にし、「オニ」と読まれている。そして、「鬼魅類十七」では、邪鬼、餓鬼、瘡鬼、窮鬼、魑魅、魍魎、醜女など鬼に関する言葉が記されている。

その中にある邪鬼（アシキモノ）の「モノ」に対して、国語学者である大野晋氏（1919）は「怨霊」と解説し⁴⁾、歌人であり評論家でもある馬場あき子氏（1928）は「深層心理に眠る原始的な不安や畏怖感に導き出された幻影」としている⁵⁾。瘡鬼（エヤミノカミ）の鬼は「カミ・オニ」と訓読され、神の荒ぶる面として「荒魂」という。また、窮鬼（イクスダマ）とは現在の貧乏神のことであるが、大野晋氏は「スダマ」の「ス」は、素足、素肌の素の意味と同じであったと推測し、「生き」という形容詞に「スダマ」を加えて、窮鬼は「イクスダマ」と呼ばれるようになったという。他の魑魅（スダマ・コダマ）と魍魎（ミヅハ）は、『山海経』（前4世紀－3世紀頃）や他の古籍によると、魑魅は山の精霊や木の精霊と見なし、魍魎は水の妖怪を意味していることから、元々は中国から来た概念であることがわかる。醜女（シコメ・ココメ）は鬼女とも呼ばれ、万葉仮名では「シコ（醜）」の代わりに「鬼」の字で表記されることが多く見受けられる。『古事記』では予母都志許売、『日本書紀』（720）では泉津醜女、黄泉の国に住む鬼神である。

『倭名類聚抄』によると、少なくとも平安時代には、鬼のような特徴をもつものに言及した場合は「モノ」、「カミ」、「オニ」、「タマ」、「シコ」の意味が込められていたものと思われる。日本の民俗学者・国文学者である折口信夫氏（1887）は、「オニ」は「カミ」、「モノ」、「タマ」とともに日本の古代信

仰において超自然的存在から出たものであるため、「オニ（鬼）」は「隠」の音読にかかわらず「神」のような「畏きもの」という性質を持っており、「神」と同じ意味であると主張している⁶⁾。そして、日本の霊魂信仰においては、日本の「神」は昔の言葉で言わば「タマ」と称したもので、「タマ」が善悪の二方面に分けられ、人間に有益だと考える部分は「神」となり、悪い部分が「モノ」となったとしている。馬場あき子氏は、「モノの方は、明瞭な形をともしなわぬ感覚的な霊の世界の呼び名に、オニの方は、目には見えなくても実在感のある実体の感じられる対象にむけての呼び名にと定着してゆく」と解している。つまり、「モノ」は「オニ」と同じく目に見えない存在であるが、「モノ」は体形もなく「霊」と同じであり、「オニ」は具体的なイメージが浮かぶものとなる。

江戸時代の考証学者である狩谷棧斎氏（1775）の『箋注倭名類聚抄』（1827）では、『倭名類聚抄』における「オニは人死魂神也」という説は必ずしも正しくないという旨を述べている。彼は、単なる「鬼」の字は牛の角や八重歯のある人食いもの、仏教の夜叉また羅刹、老物の妖怪を指すときにのみ「オニ」という訓を使うと考えている。死者の神魂は俗に幽霊、古言では「ミタマ」、「霊」の訓読みである⁷⁾。

従来の研究では、『倭名類聚抄』の「鬼」の解釈には懐疑的な議論が数多くなされているが、実際にどのような角度から見ても、日本の自国文化と「鬼」との融合過程と理解することができる。

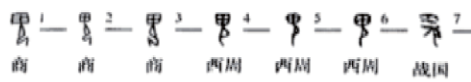
しかし、上記の研究では、「鬼」という言葉の和訓に焦点が当てられており、文字の形そのものに内在する言語的要素にはあまり注意が払われていない。漢字の和訓は次第に固定化したもので、その意味とそれに当てる和訓の意味が必ずしも一致するとは限らないが、少なくとも文献の記録だけを見ると、「オニ」と「カミ」、「モノ」、「タマ」、「シコ」は平安時代の中期まで長い時代にかけて混用されていたことが明らかになっている。借用メタ言語から借用先言語内で拡張した字義変化では、これまでとは異なった視点から、以前と違う文化の受容と変貌を見ることができる。そこで、「鬼」の字形から取り上げた様々な「鬼」のメタ言語の要素と「鬼」に関する和訓、すなわち借用先言語の固有の要素をそれぞれ見比べて検討し、字・訓・義の統合過程を考察す

ることとする。

2. 「鬼」の字の初見と字形の構成

「鬼」の起源にはなお未知の部分が多く残っているが、民俗学研究者たちは原始社会の原始宗教、自然現象から始まったものだと捉えている^{注4)}。そして、鬼の誕生は自然に対する人間の恐怖から生まれたものであり、人々の鬼に対する認識は文化の発展、信仰の変化、宗教の普及などによって絶えず変化し、発展してきたものとされている。鬼は、人類の文化における原始的な宗教や信仰に直接関連する概念の一つとして捉えられており、「鬼」という字はすでに甲骨文字に存在する数少ない古代漢字の一つとして知られている。

記号論から見ると、甲骨文字は表意文字^{注5)}であるが、一つの漢字は一つの記号素^{注6)}に対応しており、記号素に含まれる意味が字形で表現されているため、字形の構成を分解して研究することは原初的な意味を研究する有効な手段となる。『説文解字』に記されている「鬼」の字の構成に関する解説は、現存するものの中で最も早く、最も広く流布している解説である。『説文解字』によると、鬼は人の帰するところであるため「人」があり、「由」の字は「鬼の頭」のようで陰気にして賊害するため「ム」に従うとする。簡潔に言えば、「鬼」の字は、人を表す「人」と鬼頭のような「由」と賊害を果たす「ム」からなる漢字である。しかしながら、『説文解字』の「鬼」に対する解釈は秦（紀元前221～紀元前206）の時代の「小篆」^{注7)}に基づいたものである。「小篆」が使われる前に「鬼」の字の主要な字形は〈図1「鬼」の字形〉のようになっていた。



〈図1「鬼」の字形〉^{注8)}

〈図1〉を通して、各時代の「鬼」の書き方をよく観察してみると、字形が「小篆」と違い、「ム」を使う用例が皆無である。つまり、『説文解字』の字形についての解釈は、必ずしも最も原始的な意味ではないという可能性も排除できないこととなる。また、その全体は「由」という字に似た形をしてい

るという共通の特徴がある。つまり、「由」の字は「鬼」の字形で最も代表的な記号素であると言える。それでは、「由」の字を鍵として、鬼という概念に組み込まれている抽象的なシンボルを探してみよう。

3 「由」字に関する論争

3.1 死者から想像した「鬼頭」

「由」という字は「由鬼頭也、象形」と『説文解字』に記述されているが、今まで出土した文献にも、伝えられている典籍にも「由」に関わる用例が一例もなかったのも事実である。「由」という字の意味をめぐる様々な論争が起きているが、一部の研究者たちは許慎の「鬼頭」を認めている。「鬼」という字が「人」と「帰」に基づいて造られたことは、多くの鬼に関する論述の中でみることができる。主な記述としては『礼記・祭法』（紀元前51）における「人死曰鬼」、『玉篇・鬼部』（586）における「天曰神、地曰祇、人曰鬼」、『正字通・鬼部』（1598～1673）における「鬼、人死魂魄為鬼」などを挙げることができる。「人所帰為鬼」の「帰」は「死亡」を表し、『禮運』（紀元前3世紀）には「魂気帰於天、形魄帰於地」とあり、「魂気」は目に見えないものであり死後空に帰るものとされ、「形魄」は死体で、死後白骨となって大地に帰るものとされる。

『字源』（2012）^{注9)}の「鬼」の条に収録されている解釈の中で、古籀文字^{注10)}学者である林義光氏（生年不明）は「由」は巨大な頭蓋骨の象形化した字である可能性が高いと推測し、清時代の言語学者である王筠氏（1784）は下の部分が人の手と足のようになったのならば、上の部分にある頭も然りと考え、文化人類学者・考古学者・民俗学者である饒炯氏（1904）は鬼と人は顔だけ違うと主張した⁸⁾。漢字・文字研究者である李孝定氏（1918）によると、人が死んだら鬼になるという考え方は昔からあったため、昔の人々は人と鬼との間に関連性があると思っていたが、それは「生きている人」と「死んだ人」の間に違いがあったと考えていたのであろう。人と繋がりがあることは知っていても、実際鬼の姿を直接見た人がいないので、「人」という字に想像を加えて「人」の頭部を変化させた。そこから「鬼」という字が誕生したという⁹⁾。日本の漢文学研究者である高田忠周氏（1861）も、「鬼」という字は「人」の

字から変化してきた漢字であると考えている。そのことは、甲骨文字の「鬼」の字は人の形を模倣して作った象形文字で、「人」という字と「鬼」という字の構造が似ているという特徴によって確認されている¹⁰⁾。すなわち、鬼は人からなるが人に見えないもので、「鬼」という字が人の姿に似ており、頭の部分だけに想像力が加わり、大きな変化が起きたということである。

3.2 祭祀用の仮面

甲骨文字を創った殷王朝^{注11)}は、祭祀を占うことが盛んに行われたとされている。『礼記・表記』では、「殷人尊神、率民以事神、先鬼而後礼」というくだりがある。その大意は、殷人は鬼と関連する祭祀を優先し、人間の礼儀は後に置くということである。『礼記』の記録によると、後世に「殷人尚鬼」という俗語が伝わっている。また、記録だけでなく、殷商時代の遺跡で大規模な祭祀土坑から見つかっている人や動物の屍骸も、この時代に栄えた鬼神の崇拜を証明している。残存している記録と発見された遺跡から、鬼を祭ることは国の重要な行事だったと判断できる。それ故に、姚華氏(1876)¹¹⁾、張舜徽氏(1981)¹²⁾、藏克和氏(1956)¹³⁾などの近代語源・言語研究者は、祭司が奇異な仮面をかぶって祭祀を行う姿が「鬼」という字の原型であり、「由」の字は「魍魎」という恐ろしい仮面であると主張している。

原始的な祭祀といえ、今まで受け継がれてきている最古の行事として追儺がある。最も古い追儺とされているのは、『山海經』(紀元前2世紀)に、商族^{注12)}のオビトである「亥」は、牛群をつれて有易国に行った際に王后がみだらな行為をしたことで有易国の王「綿」に殺されたため、「亥」の息子「甲微」は有易国を滅亡させて敵を討った後で、非業の死で「禡」になる父上に祀ってあげたという記録である。『礼記・郊特牲・郷人禡』には「禡、或為猷、或為儺」とあり、「禡」は非業の死を遂げた人のことで、疫病や災害をもたらす恐ろしいものである。周王朝^{注13)}になって、祭司が疫鬼を祓い清めるために四つの金色の目がある仮面をかぶり方相氏と呼ばれる鬼神を演じているが、『周礼・夏官・方相氏』(紀元前1世紀)には「方相氏掌熊皮、黄金四目、玄衣朱裳、執戈揚盾、帥百隸而時難(儺)、以索室

驅疫。大喪、先匱(柩)」という記録が残っている。要するに、「鬼」という字は国家行事と密接に結びついたもので、畏敬の念を抱いた祭祀を受ける鬼神もいれば、追放されるべき鬼神もいるということである。

3.3 「夔」という怪物

一方で、「鬼」の字は人を立脚点にして作られたものでもなく、奇異な動物の姿から派生したのももあり得ると研究者たちは指摘している。その根拠となるのは、中国における各種の古書で「夔」という名前の怪物に関する記録であり、『莊子』(紀元前369～紀元前286)の「山有夔」、『国語』(紀元前678～紀元前453)の「木石之怪夔罔兩。皆借夔為鬼」などを挙げることができる。現代では、夔はオナガザルと呼ぶ動物を指しているが、古典文学の中ではそうではなかった。『山海經』(紀元前4世紀～3世紀頃)の「第十四卷」で「東海中有流波山、入海七千里。其上有獸、壯如牛、蒼身而無角、一足、出入水則必風雨、其光如日月、其聲如雷、其名為夔」とあり、上古時代には風雨を招く雷神であったと言ってもよいだろう。

牛の様子に似ている姿と気候を支配する力を持つ神獣とした夔は、『国語』では「夔一足、越人謂之山魃、人面猴身能言」という猿のような姿であり、神話・伝説では、夔は角はなく片足で牛のようなイメージの「夔牛」という「雷獸」で、人の顔を片片足猿のような「山皃」と呼ばれた獣の形態もあった。このような記録に基づき、作家であり詩人でもある王廷鼎氏(1879)は、「鬼」・「神」の字は「ネ鬼」であるはずであり、鬼は化け物と呼び「山鬼」は「猶(なお)猩猩」^{注14)}であると指摘している¹⁴⁾。文学者・思想家・革命家である章太炎氏(1869)は、「鬼」という字が初めて創られた時に世にいわゆる死者の霊はいなく、鬼と夔は似て、説文では夔すなわち魃であり耗という鬼かもしれないと推測している¹⁵⁾。また、中国語語源学者であり、北京国立故宫博物院院長でもあった沈兼士氏(1887)は「鬼」、「畏」、「禺」の三つの字は構造が似ているだけでなく、「醜いもの」、「畏れるもの」、「怪異なもの」という同様の意味も持ち、殷商時代に交換して使っていた用例もあったことから、最初は同じものを指していた可能性があり、禺という類人猿であるとも推

定されていた¹⁶⁾。

また、これにより、「顔が醜い」ような人に似ているが人ではない、あるいは本族の人ではない異民族を鬼と呼ぶものもある。よく知られているのは、甲骨文字に記録されている「鬼方」という北方で遊牧や狩猟で生きていた異民族である。

以上の「鬼」という言語のシンボルを考察することで、「鬼」のメタ言語的要素は、「目に見えないもの」、「人から想像するもの」、「畏きもの」、「追い出されるもの」、「醜いもの」及び「怪異なもの」とであると結論づけることができる。

4. 字形と和訓・字義の関連性

4.1 見えないものと想像するもの

『万葉集』（759～780）には、「モノヲ」と「モノカ」という助詞の「モノ」に「鬼」という字を当て、「鬼尾」と「鬼香」を書いた例が多くある^{注15)}。大野晋氏は、助詞としての「モノ」は「運命、動かしがたい事実・成り行き」という意味であり、本来は「怨霊」とは何の関係もないが、「鬼（モノ）」と同じモノなので「鬼」の字で当てて表記したと解説している。そして、「鬼を『オニ』と読み、恐ろしい形相の怪物を表すようになるのはやや後のことである」と付け加えた。

奈良時代の鬼は「怨霊」という「モノ」で、世に恨みを抱いたまま死んだ人の霊を指し人に見えないものであるが、恨みの相手に憑依して病気をもたらしたり、狂気に導いたり、死に至らせたりする怖い力を持っていて、相手に傷害を与える存在として見なされている。また、『日本書紀』の「斉明紀」では、斉明天皇が朝倉宮で崩御した後、遺体を盤瀬宮へ運柩する際、大笠を着た鬼が朝倉山で葬式の行列をのぞいているという記録が残っている。大笠をかぶった鬼について『扶桑略記』（1094）では「時人言、蘇我豊浦大臣之霊也」と記述し、『帝王編年紀』（1364～1380）では「人多死亡。此霊所為」としている。この蘇我豊浦大臣とは、皇極4年一朝にして滅びた蘇我氏の怨霊と示唆している。ちなみに、平安時代に書かれた『源氏物語』（1008）の「葵の上」、「夕顔」の命取りの「モノ」、『栄花物語』（11世紀）における長男の藤原頼道に病気をもたらした「モノ」なども全て「怨霊」とされている。さらに、大

野晋氏は、「モノノケ」というのは「モノ」（怨霊）と「ノ」（助詞）と「ケ」（兆候）で組み合わせる言葉であると解釈している。折口信夫氏（1975）は、モノノケの「モノ」は基本的に目に見えないものである。従って、「モノ」という読みから考えると、「オニ」と読まれる前に、鬼は「見えないが、超自然的な恐ろしい存在であるモノ」、「疫病をもたらすモノ」と考えていた。

「オニ」は具体的な外見をしている想像上のものであり、「オニ」の様子も基本的には奈良時代に形成されたものである。『出雲国風土記』（733）では、畑を開墾していた人が突然現れた片目の鬼に喰われたという伝説が盛り込まれており、その「目一鬼」に関する描写が文献上で初めてとなる鬼に関する描写となっている。

『出雲国風土記』の「目一鬼」には、「目一つ」と「人を食う」ということのみが記述されていることから、「目一鬼」の原型については様々な憶測がなされている。その憶測では、「目一鬼」という名前から、片目しかないような身体的特徴を持つ人物を連想する傾向がある。

例を挙げると、「風土記」の研究者である秋本吉郎氏（1910）の注釈には、出雲の地元の住民が異邦人の独特な姿を見て、おかしいものとして「目一鬼」と呼んだとある¹⁷⁾。民俗学者・文筆家でもある谷川健一氏（1921）の憶測では、「目一鬼」と「天目一箇神」^{注16)}の本体は鍛冶師であると考えられ、その原型は鉄器を作っていた民族で、中国南方や韓半島の南西から日本に渡った渡来人である可能性が高いとされている¹⁸⁾。民俗学者であり、近代日本を代表する思想家でもあった柳田国男氏（1875）の憶測では、大昔、神の眷属になるため人を生きたまま神へ供える生け贄の風習があり、祭祀を行う人は犠牲者が逃げた時に早く捕まえられるように、わざと片目を潰し片足を折っておいたので、片目や片足になっているとされている¹⁹⁾。

「見えないモノ」と「想像するオニ」はいずれも人と深い関係があるが、字形で現れる死者から想像するのではなく、一般人とは違った特徴をもつ人から想像力を使って作られたものである。奈良時代以降、鬼は仏教や陰陽道の影響で一層進化し、醜悪な形相と恐るべき怪力を持ち、人畜に害をもたらす想像上の妖怪になり、牛の角を生やし、虎のふんどし

をつけた様子になった。

4.2 畏きものと追い出されるもの

「万葉仮名」よりさらに古い文字としては、金属や石に刻まれた「金石文」に「鬼」の字が使われている。現存の金石文の白眉といても過言ではない法隆寺金堂釈迦三尊像後背銘に、「十二月鬼前太后」という銘文が刻まれている。この「鬼前太后」が聖徳太子の生母、穴穂部間人皇女を指すということは学界では公認されている事実である。なおかつ、穴穂部間人皇女のもう一つの称号は渥部穴穂部皇女であり、歴史学者である喜田貞吉氏（1871年）によれば「（間人）実際は古くこれをマヒトと読むよりも、ハシヒトと読む方がかえって普通であった（中略）案ずるにハシヒトが土師人^{注17)}の義なるべき事（中略）土師部は古事記に『土部』と書き、用明皇后の御名皇女である渥部穴穂部皇女の『渥部』に当る」と解されている²⁰⁾。即ち「間人」や「渥部」という名前は、皇族の墳墓造りや喪葬儀礼に関わることを掌る意味があるのである。この点は、「鬼」の字の字形が祭祀に関することによって創造されたことと一致する。しかし、なぜ穴穂部間人皇女を「鬼前太后」と記しているかについて、折口信夫氏は「聖徳太子の母君の名を、神隈とも鬼隈とも伝へて居る。（中略）此は二様にお名を言うた、と見る外はない（中略）基地は、畏るべきところとして、半固有名詞風に、おにくまともかみくまとも言うて居たのであらう」と推測している。

また、『日本書紀』にも鬼と神を対義語として使われ、「神代」では、高皇産靈尊が葦原中国に棲む邪神を追い払うために経津主神と武甕槌神を派遣したことを述べた際、「然も彼の地に、多に螢火の光く神、及び蠅声す邪しき神あり。（中略）『吾、葦原中国の邪しき鬼を撲ひ平けしめむと欲ふ。当に誰を遣さばよけむ』（後略）」と記されている²¹⁾。ここで注目すべき点は、「邪しき鬼（アシキモノ）」の中には「螢火の光く神」や「蠅声す邪しき神」などの「神」が含まれていることである。また、派遣された経津主神と武甕槌神は葦原中国の邪神と草木石類を全て平定し、高皇産靈尊に復命する際、「二の神、諸の順はぬ鬼神等を誅ひて」と記されており、「鬼神」は「カミ」と読まれ、前文の「邪しき鬼」を指している。

以上のように、奈良時代には、鬼と神には明確な区別がなかったものであり、このことは、『古事記』と『日本書紀』に記されている「崇神天皇」の治世に大物主神が疫病をもたらして半数以上の国民が死んだことから知ることができる。民俗学者である小松和彦氏（1947）は「この時代には、日本人の中にまだ明確な鬼の観念が出来上がっていなかったからである」と説明している²²⁾。鬼であれ神であれ、統治者に従わなければ追い出されなければならない。そして、平安時代になると、外来文化と地元文化の神の概念と混じり合って鬼というものが徐々に出来上がって行った。文化の統合を経て、神の災の面である「荒魂」^{注18)}を鬼と結び付け、畏きもので災いをもたらすものとして定着したと考えられている。

「鬼」の字に現れた畏敬の対象と追放の対象というメタ言語的要素を見ると、和訓の初期に鬼と神及び霊が混用された例がそれに相応する。ここでいう「畏怖の対象」の本質は、人間のコントロールが及ばない、目に見えないもの、超自然的なものに対する畏怖である。しかし、鬼が疫病をもたらすために追い出すべき対象として使われる場合、字形のメタ言語的な要素では、原始的な宗教観の強い儀式的な除霊として表現されるが、「邪しき鬼（アシキモノ）」という和訓の用例では統治者の強い力で追い出す対象という側面が強くなっている。

4.3 醜いものと怪異なもの

『万葉集』の原文では「シコ（醜）」^{注19)}の代わりに「鬼」の字で表記され、頑強なことや醜いことを意味するが、「凶悪さ」と「醜悪さ」を意味していたともいう²³⁾。しかし、『万葉集』では、「鬼」を当てた「シコ」の歌はいずれにしても恋歌であり、「シコ」は憎みのものしることで「馬鹿者にあたる」を意味し、つらい恋かつ別れざるを得ない愛に対して悲しむべき嘆きや自嘲に使われている。

例を挙げると、舎人皇子が舎人娘子を思うとき贈った歌の中の「醜のますらを」は「鬼乃益ト雄」と書かれており、大伴家持と大嬢の往来を断絶してから数年後に再会したときに贈った歌では「醜の醜草」を「鬼乃志許草」、また、相聞歌の寄物陳思歌の中でも醜の醜草は「鬼乃志許草」と表記されている^{注20)}。さらに、『万葉集』の十三巻には、夫がほかの女性の家に泊まったことに対して妻が嫉妬した歌

の中に、「醜の醜手」が「鬼之四忌手」と記されている^{注21)}。恋の中の相思、欲望、嫉妬の感情が鬼のような醜いものだという印象は、怒りと悲しみを抱えた鬼女の「般若面」と同じであろう。

また、『日本書紀』の「神代紀」では「泉津醜女」、「葦原醜男」とあり、「醜さ」は「見苦しい」という意味であった。「鬼」は「シコ」と訓を使い、「鬼」は醜い姿をしていると考えられていたのだろう。また、「醜」は伊邪那岐を追いかけていた泉津醜女も、大物主神である葦原醜男も、醜い見かけとは裏腹に強い力を有するものとして形容されている。「醜さ」は鬼の大きな特徴であり、地元の人々とは異なる容姿や行動をする異邦人は醜いお化けとされ、鬼と呼ばれる。『日本書紀』の「欽明紀」には、佐渡島にわたってきた肅慎という民族を「鬼魅」や「魅鬼」と呼んでいる。「鬼魅」の注解では、たぶん背が大きくて怖ろしい顔をし、服を着ずに上体をむき出しにした野蛮な人が「オニ」に似ていたからであると。同じような用例は『常陸国風土記』(721)にも、「東の山に石の鏡あり。昔、魑魅あり(中略)俗、疾き鬼も鏡に面へば自ら滅ぶといふ」とある。秋本吉郎氏は、「魑魅は人面獣身、四足にして好く人を惑はす(史記注)」という怪物の称。同化しない異種人を、その体の特徴を誇張して呼んだもの」という注釈を附している。

中国の古文書にも「鬼魅」という言葉があることは知られているが、『日本書紀』と『常陸国風土記』における「醜いもの」とは異なり、「木の精は魅、山の精は鬼」(『文選』(6世紀前半)の「蕪城賦」とあり、魂に似た無形の存在として使われていた。中国の古文書も引用している『倭名類聚抄』では、「魑魅」という言葉は老いたものに付く霊と解釈され、「スダマ」あるいは「コダマ」という訓があった。

折口信夫氏は、「たまは抽象的なもので、時あって姿を現すものと考えたのが、古い信仰の様である」と解釈した。要するに、「タマ」はアニミスティックな感覚や印象があり、「オニ」のような強い実体感とは異なる。しかも、「醜いもの」という明確なイメージを表す「シコ」とは異なり、「タマ」という抽象的な概念は目に見えるものではなく、一般的なものとは違い不思議なものを意味する。

鬼は「醜いもの」で「怪異なもの」というメタ

言語要素は、字形の表現上「夔」と呼ぶ伝説の化物や「禺」と呼ぶ類人猿と緊密な関係を持つものであることが理解できる。それは、具体的に感覚できる醜くあるいは怪異な形体をしているものによって造り出す字形である。一方、「シコ」で表す鬼は怖くて見苦しい感じがすると推測されるが、『万葉集』の和歌では恋の苦しみと恋人の薄情を表すのに使っている。外見が普通の人とは違う異邦人を鬼と呼ぶが、「鬼魅」や「魑魅」という一般認識では、むしろ特定の身体的特徴を持たないものを指すことが多い。異邦人という「鬼魅」と異なり、「タマ」と呼ばれる「鬼魅」の性質は靈魂に似ている。怪異とは、具体的で変わった様子のことであり、また、常識とかけ離れた目に見えない不思議なものを指すこともある。

5. まとめ

日本人の鬼に対する考え方には、歴史的な変化がある。「オニ」という和訓に定着化する前には鬼という固定概念はなく、様々な意味的要素が絡み合っている。「鬼」の字が文字を作る時に溶け込むメタ意味要素のように、これらのメタ言語要素は「鬼」の字の異なる和訓によって表現されたが、それぞれのメタ言語要素は、受け継がれてきた借用語のオリジナル要素と日本文化との融合によって生まれた新しい言語要素の両面から、日本語と融合している。

字形の構造に含まれる鬼のメタ言語要素と「鬼」の和訓で再現された言語要素との比較により、「見えない恐怖のもの」という要素を病気や死をもたらし怨霊に固定した。一方、「想像上のもの」というイメージは、一般人とは違った特徴を持つ人から想像力を使って作られている。「鬼」の字形から現れる「帰」の意味と「死者は大地に帰る」という中国の伝統意識が日本語の文脈ではほとんど反映されず、日本文化に取り入れられなかった。また、「追い出されるもの」という要素が日本語で表現されているが、その文脈や使用対象は幾分異なっていて、災いだけでは統治に従わないものも含めている。

このように、日本の死生観と鬼との関係は薄く、鬼と関連したのは病気、人を食う怪物、反乱者など人間や支配集団の利益との対立である。一方、メタ言語要素の転換では「醜いもの」に対する理解と表

現が最も異なり、恋愛では嫉妬、不満、悲しみを鬼の醜さと無情さで表現し、一般的な意味では「醜いもの」に対する認識を超えて日本人の情愛に対する感性的な理解が強く表われている。

しかし、平安時代以降、文化の発展と変遷に伴い、「鬼」の和訓は次第に分離して固定化され、「モノ」などの和訓は鬼の意味から分離され、現在一般に考えられている鬼へと発展してきた。鬼の意味が徐々に分離していく過程については、今後の検討課題とする。

【文献】

- 1) 佐々木翔太郎 (2010). 「日本と中国における「鬼」のイメージの差異について—マインドマップ調査の分析—」, 『山口大学文学会誌』, pp. 61-73
- 2) 漢・許慎. 大徐本. 説文解字. 北京：中華書局；2009. p.34
- 3) 源順 撰 (1617)『倭名類聚抄』出版者：那波道圓 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2544216?tocOpened=1> (検索日：2022-12-13)
- 4) 大野晋. 古典基礎語の世界. 東京：角川ソフィア文庫；2012. pp.231, 245
- 5) 馬場あき子. 鬼の研究. 東京：ちくま書房；1992. p.44
- 6) 折口信夫. 折口信夫全集3. 東京：中公文庫；1975. pp.3-4, 216
折口信夫. 折口信夫全集17. 東京：中公文庫；1976. pp.149, 457
- 7) 狩谷棧斎 (1931)『箋注倭名類聚抄』上巻 曙社出版部 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1872112> (検索日：2022-12-13)
- 8) 李学勤 (主編) (2012). 『字源』. 天津古籍出版社. p. 805
- 9) 李孝定. 金文詁林読後記. 北京：中央研究院歴史語言研究所；1982. p.348
- 10) 李圃 他 (編). 古文字詁林. 上海：上海教育出版社；2004. p.6059
- 11) 姚華. 弗堂類稿. 近代中国史料叢刊続輯. 台北：文海出版社；1974. pp.138-139
- 12) 張舜徽. 説文解字約注. 鄭州：中州書畫社；1983. p.42
- 13) 藏克和. 説文解字的文化説解. 武漢：湖北人民出版社；1995. pp.336-337
- 14) 張世超 他 (編). 金文形義通解. 北京：中文出版社；1996. p.2225
- 15) 章太炎. 小学答問. 章太炎全集・七. 上海：上海人民出版社；1999. p.431
- 16) 沈兼士. 鬼字原始意義之試探. 沈兼士學術論文集. 北京：中華書局；1986. p.199
- 17) 秋本吉郎. 日本古典文学大系2「風土記」. 東京：岩波書店；1972. pp.82, 238
- 18) 谷川健一. 谷川健一著作集：古代学篇Ⅱ. 東京：三一書房；1980. p.340
- 19) 大間知篤三ほか. 日本民俗学大系8「信仰と民俗」. 東京：平凡社；1960. pp.119, 128
- 20) 喜田貞吉. 喜田貞吉著作集：部落問題と社会史. 東京：平凡社；1982. p.305
- 21) 坂本太郎 井上光貞 家永三郎 大野晋 日本書紀・上. 東京：岩波書店；1967. pp.98, 135
- 22) 小松和彦. 「鬼」は「鬼」である. 歴史読本. 特別増刊・事典シリーズ. 日本「鬼」総覧. 東京：新人物往来社；1994. p.40
- 23) 大野晋, 佐竹昭広, 前田金五郎編. 岩波古語辞典. 東京：岩波書店；1978. p.603

【注釈】

- 1) 漢字文化を受け入れたことで、日本語は大きく変化した。一方、輸入された漢字文化も、日本語に適応するために変化を遂げてきた。漢字、漢語、漢文の日本語化過程は和化（倭化）といえる。
- 2) 甲骨文字は1890年代に殷墟から出土し、世界各国の研究者たちがその研究に身を投じていたが、「鬼」という字は研究当初、羅振玉によって認識されたのだった。(李学勤 (主編) (2012). 『字源』. 天津古籍出版社. p.805)
- 3) 言語接触によると、「鬼」という字の字義の和化は借用メタ言語（中国語）の要素を借用先言語（日本語）の固有の要素で再現するものである。
- 4) 日本の民俗学の創始者の一人である石橋臥波 (1800) は、太古の人が自然現象と人間の疾病、死亡など太古の人々に被害を与えたことを「鬼」

- の仕業と見なしているが、それが「鬼」という概念の誕生だと示唆されている。また、民俗学者である近藤喜博（1911）は「鬼」の成立を人と自然の相互作用の産物と考えられている。
- 5) 表意文字は意味をもつ記号で成り立ち文字である。今までに認識されている甲骨文字はすべて表意文字である。
- 6) 記号素は言語記号において意味をもつ最小の単位とされる。
- 7) 秦が中国を統一する以前は、国ごとに自分の文字があり、文字は似ているが統一されていなかった。そこで、秦の始皇帝は中国を統一した後、大篆あるいは籀文を整え、簡略化し、小篆と称する新しい字体を制定して全国に普及させた。
- 8) 画像は『字源』の805ページから引用している。
- 9) 漢字の起源を探究することを目的とし、古代中国語で一般的に使用されていた約6,000の漢字の古今語源研究成果を収録している漢字辞書である。
- 10) 古籀文字は、中国の殷代（紀元前16世紀ごろから紀元前11世紀ごろ）に使用されていたとされる、甲骨文字・鐘鼎彝器・石鼓文・古陶・古幣・古兵器などにみられる文字の総称である。
- 11) 中国で考古学的に確かめられる最古の王朝である。紀元前17世紀頃から紀元前1046年まで存在していた。
- 12) 商族は殷王朝を立てる前の歴史である。
- 13) 商王朝後の王朝であり、紀元前1046年から紀元前256年まで存在していた。
- 14) かつて中国南部に生息していたが、現在は絶滅した人間のような顔をした類人猿。
- 15) 『万葉集』には、「鬼」を借訓の字として「モノ」の表記にした例が、547、664、1350など、合計11例ある。例：万葉集・五四七 天雲之外従見 吾妹兒尔 心毛身副 縁西鬼尾（天雲の外に見しより 我妹子に 心も身さへ 寄りにしものを）
- 16) 「神代紀」によると、高皇産靈尊が製鉄・鍛冶の役割を天目一箇神に付与した後、「作金者」になった天目一箇神は、刀、斧などの鉄器を鍛える技術を身につけた。また、鍛錬の神を祀る金屋神社は出雲地域にあるが、昔から出雲地域は鉄器の鍛造で有名である。
- 17) 土師人は、古墳時代に古墳の築造や土器の焼成に職し、殯を管掌する人である。
- 18) 日本の神は「和魂」と「荒魂」という二面性を持っている。「和魂」とは、人々に恵みを与え、やさしく温和な靈魂を指し、「荒魂」とは、勇猛さ俠義の反面に狂暴で、時には災いをもたらしたり、疫病を引き起こしたりする靈魂である。
- 19) 『万葉集』には、「シコ」の表記に、いわゆる借訓の字として「鬼」を使った例が、117、727、3062など、都合9例ある。
- 20) 万葉集・一一七：大夫哉 片戀將為跡 嘆友 鬼乃益ト雄 尚戀二家里（ますらわをや 片恋せむと 嘆けども 醜のますらを なほ恋ひにけり）；万葉集・七二七：萱草 吾下紐尔 著有跡 鬼乃志許草 事二思安利家理（忘れ草 わが下紐に 着けたれど 醜の醜草 言にしありけり）；万葉集・三〇六二：萱草 垣毛繁森 雖殖有 鬼之志許草 猶戀尔家利（忘れ草 垣もしみみに 植ゑたれど 醜の醜草 なほ恋ひにけり）
- 21) 万葉集・三二七〇：刺將焼 小屋之四忌屋尔 搔將棄 破薦乎敷而 所<捨> 將折 鬼之四忌手乎 指易而 將宿君故 赤根刺 晝者終尔 野干玉之 夜者須柄尔 此床乃 比師跡鳴左右 嘆鶴鴨（さし焼かむ 小屋の醜屋に かき棄てむ 破れ薦を敷きて うち折らむ 醜の醜手を さし交へて 寝らむ君ゆゑ あかねさす 昼はしみに ん ばたまの 夜はすがらに この床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも）

[Original Article]

Structure, Pronunciation, and Meaning of the Japanese Character 鬼 (Oni)

Yu xin¹, Gao jifen²

¹*Chengdu Neusoft University*

²*Kyushu University of Nursing and Social Welfare*

[Abstract]

From its introduction in Japan, kanji has undergone a long process to being established in Japanese culture and becoming what it is today in terms of form, pronunciation, and meaning. Examining this process is essential for studying Japanese culture. Especially from a language contact perspective, the transformation of kanji reflects characteristics of cultural change, and its readings (phonetic complements) are important for Japanese cultural research.

In this study, we focus on the character 鬼 (oni), which is significant in Japanese culture, and examine its structure and the image it represents. Moreover, we trace the pronunciations of oni in ancient literature and compare the meanings contained in each pronunciation. Through a comparative investigation of the structure, phonetic complements, and meaning of this character, we further explore its unique sensitivity in Japanese culture.

Keywords: *oni, language contact process, character summing, cultural sensitivity.*

* Corresponding author.